

「私は何のために生きているのか」。忙しい合間のふとした瞬間に、そんなことを自問自答している姿に気づかれるかもしれません。周囲を見渡せば、自分より仕事ができる人もいる、自分の代わりなどいくらでもいる、社会から置いていかれるような寂しさや劣等感を感じる…そんな環境で生活していると、ふと「私は何のために」という問いがもたげてくるときがあるのです。

本日の聖書箇所には、漁をしていた弟子たちに復活のイエスが現れた次第が記されています。弟子のペトロが「わたしは漁に行く」と切り出し、他の弟子も「わたしたちも一緒に行こう」と応答する形で、漁が始まりました。何気ないやりとりですが、ここには皆で宣教を担い合おうとするヨハネの教会の姿が重ね合わされていると感じます。また、彼らは20章の部分で、すでに復活のイエスに出会い、喜びと信仰に満ち溢れるような経験をしていますから、その心は熱く燃え、勢いもあったことでしょう。しかし、現実とは過酷なものです。そのようなチームワークと熱意をもってしても、「何もとれなかった」（3節）、すなわち教会は宣教の実りを得ることができなかったのです。おかしい。思っていた展開と違う。そんなことを繰り返している内に、ある問いがもたげてくるのです。「私は何のために、こんなことをしているのか」。人が生きる意味や働く意味を見失うことほど、生きる意欲を奪い去っていくものはありません。

そんな現実のなかに、イエスが再び現れます。そして、弟子たちはイエスの言葉に従うと、何も捕れなかった状況から、大量の魚が与えられる出来事へと導かれていきました。ただ、彼らは、魚が捕れたことよりも、復活のイエスを見出せたことに喜びを感じている様子です。つまり、ここには、生きる目的や意味を見失いがちな私たちの前に、その指針として再び現れ、生きる力を回復されるイエスの姿が示されているのではないのでしょうか。

イエスは、岸辺で朝ごはんを用意しながら弟子たちの帰りを待っています。そして、彼らが到着すると「さあ、来て、朝の食事をしなさい」（12節）、「ごはんですよ」と招き返すのです。そのような招きのなかで食卓を囲むとき、人は暗黙の内に自分の帰る場所を確認し、再び出かけていくための力と勇気を養っていきます。まさに教会は、「ごはんですよ」というイエスの招きのなかで帰っていく場所、礼拝を捧げ、聖餐を囲むなかで、私たちの生きる指針を繰り返し確認する場所でもあるのです。

（文責：望月達朗牧師）

